

“Tree of Life (人生の木)” を用いた学生と高齢者の協働ワークショップ

—今治市関前地区小大下島における実践

池田 明子、岡本 晴美、矢原 隆行

はじめに

本稿は、社会福祉専門職養成に必要な利用者理解を促すための新たな方法を用いた実践研究を行い、そこでの学生の利用者理解を促す要因について明確にしていくことを目的としたプロジェクト研究（「ナラティブ・アプローチを用いた社会福祉系学生のアセスメント力向上に関する研究」¹⁾）の実践報告である。当該研究の背景には、社会福祉を学ぶ学生に求められる、より深く利用者を理解するためのアセスメント能力の向上といった社会的要請がある。アセスメント能力の向上のためには、学生自身の生活体験、学習経験を基盤とすることが必要であり、その経験は共同的な実践の場で育まれると考える。

本稿は、上記研究テーマにもとづく実践の一部を紹介するものである。この実践は、ナラティブ・アプローチのなかでも、我が国では未だ本格的な実践研究がなされていない「Tree of Life (人生の木)」というツールを用いた実践事例であり、ここでは実践報告を行うと同時に、実践の意義についての考察を試みる。第1章では、岡本が、“Tree of life (人生の木)”の概要とそれを用いたワークショップについて紹介する。第2章では、池田が、愛媛県今治市関前地域にある小大下島における本学学生・筆者らと島民による Tree of life (人生の木) を用いたワークショップの実践を学生や島民の様子をふまえながら紹介する。第3章では、小大下島におけるワークショップのリフレクションとして、矢原が、ナラティブ・コミュニティの観点からの考察を試みる。

I. ツールとしての “Tree of Life (人生の木)”

1. Tree of Life (人生の木) の概要

Tree of Life を一言で説明するならば、自らが描いた「木」の絵の中に自分の人生の軌跡を記していくワークである。この Tree of Life は、南アフリカ・ジンバブエにある REPSPI²⁾に所属

していた 心理学者 Ncazelo Ncube (現在は、ネルソンマンデラ児童基金のシニアプログラム・マネジャー) と David Denborough (ダルウイッチ・センター財団)によって開発されたものである。David Denborough は、Tree of Life の開発について、次のように述べている (2014 : 10-11)。

私たち、そして他者の物語る権利について考え、それを護り、あらためて求めていくと同時に、私たちが、自分の人生の物語をいつ語り、誰に語るのかを考慮することは重要なことである。(中略) 私たちの人生が混乱した状況にある場合、それは、流れが速く、障害や危険に満ちた川のようなものである。もし、私たちが、流れの速い川の中にいるのであれば、それらの障害や危険について語るときではないだろう。その代わりに、直ちに、川から抜け出す努力をしなければならない。私たちは、混乱状態から抜け出す方法を見つけ出し、流れの速い水の中から川岸へと這い出すことができたそのとき、そこから自分の人生をふり返ることができる。

川岸に立って眺めるような創造的な一つの手段が、“Tree of Life” と呼ばれるものである。自分の人生を見つめるこの方法は、ジンバブエに起源がある。南アフリカ/ジンバブエの心理学者である Ncazelo Ncube と私は、HIV/AIDS にまつわるさまざまな喪失と闘っている人々を支える方法として共同で開発を行った。いまや、Tree of Life は、世界中の多くの状況のなかで用いられている。

上記に示したように、Tree of Life は、もともと、困難な状況をくぐり抜けてきた人々が、これまでの人生を見つめ、意味づけ、これから生きていくことを模索する勇気と希望を見出すためのワークとして用いられた経緯がある。“語る” “語りなおす” なかで、ストーリーが書きかえられ、発展していくことは、ナラティブのもつ可能性であるが、Tree of Life は、単に、木を書くだけではなく、ナラティブを介して他者と共有することに意義がある。

類似した困難を経験していたとしても、それをいかにして語るのか、ストーリーをどのように筋立てていくのかによって、そこから生み出される意味も、その後に展開されるストーリーの筋も変わってくる。そこで変わってくるのは、ストーリーといった話の内容だけではない。他者に自分の人生について語るなかで、話の内容を共感的に受け止めてくれる他者の存在に支えられ、また、語る自分自身を客観的に見つめることによって、新たに自分の人生の意味に気づき、自分のアイデンティティを編みなおす機会にもなる。その体験は、語り手がこれから生きていく支えとなるだけでなく、それは、誰かの語りを支えるといった形で、他者の人生を支える契機ともなる。

このように、ナラティブ・アプローチを行うツールとしての Tree of Life を実践する際には、さまざまな人とつながって、共有するといったコミュニティの視点をもつことが重要である。

2. Tree of Life (人生の木) を用いたワークショップ

ここでは、Tree of Life を用いたワークショップの概略を示しておく (Georgia et al. 2009; Ncube 2006)。Tree of Life のワークショップは、4つのパートで構成されている。

(1) パート1: 人生の木

参加者には、用紙が1枚ずつ配られる。参加者は、その用紙に、色つきのカラフルなペンを使って、自由に、木の絵を描くようにうながされる。描き終わったら、自分の木についてペアになって話をする。その後、みんなの前で自分の木について話しても構わない参加者には、話をしてもらおう。最後に、Tree of Life のワークショップに参加した体験をふりかえって、その感想を他者に語る。

このパートの目的は、参加者のそれぞれの人生について“もう一つの人生の物語”を構築し、受け入れていくことにある。“もう一つの物語”とは、それぞれの人のスキル、能力、希望や夢が織り込まれたものであり、その人の人生の歴史である。

木の絵の中には、根や幹、枝や葉などに自分の人生の軌跡や思いが書き込まれていく。具体的には、以下のような内容が書き込まれている。

- ①根 : 出身地や家族の名前、自分の先祖のこと、自分にとって“ふるさと”“お気に入り”と呼べる場所や地域など、自分のルーツ。用いる言語やなじみの文化。自分が所属している集団のことなど。
- ②大地 : 自分が住んでいる場所、地域や生活圏など。
- ③木の幹: 自分が関心をもっていること、何に価値を置いているか、性格や得意なことなど、自分を表す言葉。
- ④枝 : 近い将来、あるいは遠い将来にかかわる自分の夢や希望、望み。
- ⑤葉 : 自分にとって大切な人、自分が影響を受けた人 (亡くなっている人も可)。大切に思っているペットや架空の友だちも含む。
- ⑥実 : 自分がこれまで人から与えてもらったもの (たとえば、プレゼント、大事にしてもらった体験、かけてもらった言葉など)。
- ⑦種 : 自分が誰かのために残したいもの。自分がこれまでの人生で得たもの、反対に自分は得ることができなかったもので、他者、若者のために与えたい、残したいと思うもの。

(2) パート2: 人生の森

参加者が描いた木の絵を壁に貼る。参加者は、木の絵が貼られた、いわば人生の森のようなたくさんの絵のなかから、自分の絵以外の絵を選び、コメントを入れる。たとえば、「励みにな

りました」「自信と自尊心を持って」「幸せになって」「素晴らしい人生」「あなたは、レースのなかにいるけれど、あなたは一人ではない」などのコメントが書きこまれる。すべての人がコメントを入れ終わったら、自分の絵の前に行き、そのメッセージを読む。

このパートでは、他の参加者という人生の物語の立会人の存在が大きな意味をもつ。他の参加者からもたらされた賞賛と励ましは、物語の語りなおしに影響を与える。

(3) パート3：人生の嵐

参加者は、人生のなかで経験してきた困難とそれに対して果敢に立ち向かってきたことについて語るようにうながされる。このパートの目的は、参加者が再びトラウマを負うことがない形で、自分の困難を語ることにある。“人生の嵐”について語るこの方法のユニークな点は、自分の経験と問題の間に距離を置くことによって、ネガティブなストーリーを思うままに語ることを容易にするために、参加者とともに共有する経験として位置づけることにある。同時に、参加者を犠牲者ではなく、人生のエキスパート（専門家）として位置づけ、困難に立ち向かってきた英知と能力をその語りから浮き彫りにする。このことは、参加者に希望の感覚を提供することになる。

そして、参加者同士が、お互いの話を聴きあうことが、お互いに支え合うことになり、自分の語りが他者の幸せにつながっていくことを実感する時間となる。

(4) パート4：証明書の発行とクロージングの歌

ワークショップに参加したことを証明する「証明書」を発行し、クロージングの歌を参加者全員で歌って終了する。「証明書」として、参加者には項目が記された白紙の用紙が配られ、記入するように求められる。その項目とは、①スキルと能力、②将来に対する夢と希望、③人生において感謝している特別な人の3つである。参加者は、その項目にそって、自分の Tree of Life のふり返りをおこなう。

その後、パート1でペアになった相手を前に、声を出して「証明書」を読み上げ、お互いに讃え合う。このセレモニーは、とても感動的なものであり、お互いの人生における経験を讃え合う時間となる。祝賀のセレモニーとして歌をつくり、このワークショップは終了する。その歌は、ワークショップの間、参加者が用いた単語からつくられる。人生の嵐に立ち向かった人々の対応、能力、スキルや価値を含んだ歌となる。David Denborough (2004: 23)は、次のように述べる。「人々が人生の物語を語るために使用する詩的で示唆に富むフレーズがメロディーに織り込まれるとき、彼らのストーリーとして、何らかの形で記憶に残っていたものが、異なった形でより重要な意味を帯びるものとなる。これらの歌が記憶されるとき、この先、参加者は、いつでも誰かの特定の旅（人生）を思い出し、スキルや知識を蓄積していくことができるだろう。」歌にすることにより、私たちは誰かが歌っているのを耳で聞くことができ、歌詞を眺め、自分でも口ずさむ。その行為が、参加者とともに共同でつくりあげた歌を記憶させ、何度でも

想起することを容易にする。そして、これからの人生を支えるコミュニティの歌となる (Denborough 2002)。

ここで示したワークショップの流れは、一つの雛形であり、世界各国では、基本の理念をふまえてアレンジを加え、多様なワークショップが展開されている。

次の章では、上記のワークショップの流れのパート1とパート2をアレンジして用いた実践について紹介する。

II. ワークショップ実践の流れと各場面における気づき

1. ワークショップ実践の流れ

(1) 実践当日までの準備

2015年12月8日：研究協力者学生への「人生の木」作成の講習と演習（120分）

本研究のテーマである、Tree of life (人生の木)作成については、研究協力学生に対して事前に1コマ演習講義を行った。協力学生は、学部2年次生4名、3年次生9名の計13名。うち3年次生の5名は、日頃から今回の研究協力者である島民の方々との交流を学生の自主的ボランティア活動を通じて行っており、2名は交流経験1回である。

今回の事前演習で当日使用する道具の検討を行い、クレヨン、ポスカ、色画用紙を実際に使って確認した。自分の「人生の木」を描くとき、進行の教員の促しに学生からは「絵がへただから」「画用紙は縦横どちらに使うの」「好きな色の画用紙を選ぶと楽しい」「画用紙の色と使うペンやクレヨンの色が重なると見えにくいね」など様々な発言があった。また、言葉を描き入れるとき「あまり考えすぎないで」の司会の言葉に、徐々にリラックスしながら、描き進めることができた。「木の幹」に自分自身を描くところでは、自分で自分のことを書くことをためらう学生には、他の学生が「あなたはこんなところが凄いわ」など助言するなどして作成していた。「葉」の大切な人を書くところでは、「家族」「友人」「ペット」と大きな単語表現でくっけている学生や具体的に名前を書く学生と様々であった。学生同士で会話をしながら描いていきつつファシリテーターである教員の助言を受け、学生は木を描いていった。「実」では、「嬉しかったプレゼント」と記入した学生に教員が、「それは、誰からもらったの」と質問すると「おじさんから」と答え「それではおじさんは、あなたにとってどんな存在ですか」と質問すると「あっ大切な人だ」と答え「それでは、葉のところに戻って書いてもいいですよ」といったやりとりも見受けられた。他の学生にも途中で何か思い出したら、後戻りして書き足ししてもいいことを伝える。

事前演習で学生は、道具の事前準備の重要性に気づいた。新品のポスカを使用する場合、色がはじめからスムーズに出ないことで、進行の妨げになること気づいた。合わせて、島民の方々が楽しんで書くために道具についての選択も重要であることを描いているうちに気づ

く場面もあった。また、会話も絵を見ながら、「理由を尋ねていくと、盛り上がるのではないか」「なぜ好きなのか」「いつの出来事なのか」「どんな物なのか」などといった気づきも得た。

また、島民の方々の話をよく聞いて主旨を確かめゆつくりと進めることもいい関係でワークが進むことになる。このようなソフト面も当然必要な配慮事項として重要であることを確認する。

事前の演習により、学生も教員も見通しを持つことができ、当日の進行についての不安を軽減することにつながった。

(2) 実践当日の流れ

2015年12月20日：島民と「人生の木」を作成する。(所要時間90分)

当日、参加学生は、学部2年次生3名、3年次生12名、院生1名、の15名であった。

今回の島での実際は次の表の通りである(表1)。

表1. 小大下島における「Tree of life (人生の木) ワークショップ」

時間(分)	活動内容
10:15~10:25	受付: 当日は、好きな色の紙を選ぶということは準備していた色画用紙を忘れたため実施できなかった。急遽、島民の方から集会場の模造紙の提供を受け、A3サイズにカットし、各自に白紙1枚を配布することができた。自分で選んだテーブル席に着席する。
10:25~10:35	1. あいさつ 本日の参加者紹介をする。 学生の参加者の紹介を行う。一人ずつマイクで名前を述べる。島民の方々は笑顔で拍手していた。
10:35~10:40	2. ペアで着席(高齢者と学生の1対1になる) 学生と島民が2人1組になるように着席する。学生は真横に座るまたは向い側に座るなど、島民の方と会話がしやすいように位置取りをしてペアになった。
10:40~11:20	3. 「人生の木」ワークショップ開始 司会から本日の活動内容の説明を受けると、「絵は苦手だわ」という発言や「わしの木は樹齢が〇〇年になるぞ」という発言が聞かれた。学生は絵が苦手な方には「大丈夫ですよ。私が手伝いますから。はじめに何色で描きますか」と活動をすすめたり、「凄いですね、樹齢〇〇年ですか」と同調して雰囲気をつくっていた。 司会から次のパーツを書く指示が起きるたびに、学生と島民はお互いの絵の仕上がりを見比べ会話を弾ませることができた。それぞれのパーツが示す自分の経験を文字で表現するとき、「字がようわからない」「〇〇ということを書きたいんだが、どう書いたらいいかな」など表記や表現の方法について戸惑う場面がみられた。学生は自分

	<p>の手を止めてゆっくり「それは、いつのことですか」「どのような物ですか」など質問をしていた。</p>
11:20~11:40	<p>4. お互いの「人生の木」について紹介する。</p> <p>司会から「出来上がった木を紹介し、木に命名をしてください」と促しがある。お互いの出来上がった人生の木をみて、それぞれのパーツに描かれている言葉に眼をむけ、関連付けながら、話を聞いた。話を聞き終わると学生は、島民の方に「木に名前をつけましょう」と提案をし、お互いのコメントを記入したり感想を述べたりした。改めて自分の木を眺め見せあいながら「また、若い人と恋愛がしたいわね」など学生と語り合っていた。また、コメントの記入や紹介する時間は、ファシリテーターである、教員がそれぞれのテーブルを周り、仕上がった絵について、説明を聞き、学生が島民の方の表現したいことが、十分要約できなかつたり、意味がわからないとき、追加の質問をして会話が進むように促した。島民の方は、表現方法がわからない自分の「人生の木」のタイトルについて、学生と相談し「夫婦の木」などの命名をされると、嬉しそうな表情を浮かべて再度眺めるなどの様子が見られた。</p>
11:40~11:50	<p>5. 「人生の木」を飾る</p> <p>一人ひとりの「人生の木」を持って全員集合の記念写真と、合わせて各個人の絵も写真に撮る。</p>

(3) 演習風景

【事前の演習写真】



写真1 事前演習①



写真2 事前演習②

【当日の演習写真】



写真3 受付後



写真4 自己紹介



写真5 司会進行①



写真6 司会進行②



写真7 「人生の木」創作風景①
「私の木は、樹齢90年じゃ」



写真8 「人生の木」創作風景②
「葉っぱの色はどちらにしますか」



写真9 作品①
お互いに人生の木の紹介

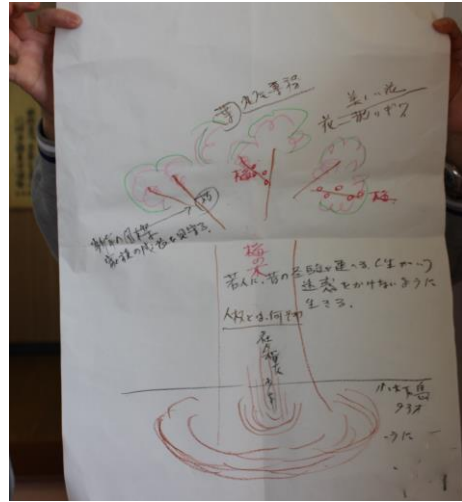


写真10 作品②
注：個人情報保護のため加工



写真11 多くの木が集まり「人生の森」
のできあがり。



写真12 ワークショップが終わって

2. 各場面における気づき

(1) 受付、あいさつ、ペアでの着席場面

今回、画用紙の好きな色選びをすることは、学生が色画用紙を持ってくることを忘れるというハプニングのため実施できなかった。そのハプニングも島民の方々には受け入れてくださり、咄嗟の判断で集会場にある模造紙を提供してくださるというフォローがあった。学生たちは緊張したものの、参加している島民の方々の懐の大きさを実感したのではないかと。また、2回目の訪問の学生も再会を喜んでくれる島民の方々に、顔なじみになることの大切さを実感できたのではないかと。ペアになるときもスムーズになることができていた。

(2) 「人生の木」のワークショップの場面

絵を描くということで、「私のは樹齢〇〇年の木になるぞ」など参加者のなかでも前向きな発言からスタートする方と「私は絵が苦手」というところからスタートする方がおられた。そのとき、学生はそれぞれの方の意見を受け止め、「凄いですね、〇〇年ですか」と同調したり「私が手伝いますから」と言って、「何色で描きますか？」とクレヨンの色を選んでもらったり、「何をはじめに描きますか？」と自然にワークを進めるコミュニケーションの取り方を工夫することができた。また、「幹」を描くならば、「この辺に、線を（上から下）シュッと描いてみましようか」と線を引く場所を具体的に指でなぞるなどすることで、絵の仕上がりを気にする島民の緊張をほぐし、さりげなく支援役をするという役割意識が持てるようになった。そのような役割をしたことで、ペアの雰囲気はほぐれ「木」を司会から指示されるように描くたびに、隣同士、絵を見比べ会話が始まった。それぞれの、絵のパーツが意味するものを、文字で表現していく工程になると、真剣に考えたり、人の書いているものをのぞき見したりと、学生も様々な表情ができるようになっていった。

学生とファシリテーターの協働により、学生の島民の方への声かけがスムーズになった。演習場面では自分で言葉を選んで大切なものや出来事、人物を書くためか、固辞されるような場面はみられなかった。しかし、言いたいことを端的な言葉で表現するときに、うまくいかないという島民の方に対し、学生が助言者となる。また、力不足ならファシリテーターとして、巡回する教員等と一緒に考えるなどの方法がとられた。そのことにより、島民の方の表現したいことができ、「そうそう」と満足な表情を引出すことができた。

パーツで難しいのは、「枝」であり、「人生の希望」を書くところである。「もう、人生も終わり、希望なんてない」と否定的なことになりかねない。学生たちは、自分たちの人生と島民の人生のライフサイクルの段階の違いを感じるところではなかったかと思われる。司会からの「今日、この活動がすんでからしたいこと、明日のこと、来週のことでもいいですよ」という促しに「居酒屋に行きたい」という言葉がでて、さらに会話が進んだ。

一方、学生同士のワークではみられなかったが、学生も島民の方から助言されたり、質問されたりすることでワーク活動が促され、自分の人生の物語を肯定的に捉えていくことにつながっていた。同じワークをすることから相互の力のやり取りが行われ、そのことが素直に自己肯定につながっていくのではないかと思われる。

(3) お互いの「人生の木」の紹介の場面

「人生の木」は一つひとつのパーツに意味がある。その意味に沿って書き込んでいき、やがては、そのキーワードが関連づいて自分の人生を表現しているということを読みといていった。そのとき、言葉と言葉の関連づけについて読み解く力が必要になってくる。その関連づけができれば、自分の「人生の木」のテーマに命名できる。じっくり考えるのではなく、それらのワードが与えるひらめきに沿って素直に喜びをもって、前向きな表現になるように命名すること

が大切であることに気づく。ここの部分で、全員ワークを終えて、ほっとした面持ちと人生の木の全貌と対面して、今の自分につながっていることに気づいた。このことで自分でも気づかなかった自分を肯定的に捉えることになったのか、しみじみ眺める学生の姿がみられた。一方、学生たちに支援者として求められているものは、一人ひとりの木にある豊かな言葉を関連づけ、感じて要約する力であった。学生には、まだ、島民の方のこれまでの人生を多角的にみて要約できる力が不足しており、そのため島民自身がなんとか命名しており遠慮がちなテーマになっていた。

(4) 「人生の木」を飾る場面

島民と学生が互いの「人生の木」についてお互いの絵を眺めての感想を述べ和やかな雰囲気の中かで今回のワークを閉じた。その後、島の方々と昼食を囲む場面では、「久ぶりに絵を描いた」とワークそのものに、新鮮さを感じておられる方もおられた。お互いの人生経験を伝え合うことで育まれる人間関係の形成について、一方的に話を聞くときよりも良好なものが形成されたのではないかと考える。一人ひとりにワークの感想を伺うことはしなかったが、別れるまで学生と島民の会話が途切れることなく交わされていることから、何かしら伝えあうものがあったと考えられる。

Ⅲ. リフレクション—本実践の含意と考察

1. 実践のコンテキスト

まず、本実践のいくつかのコンテキストについて振り返っておこう。一つめは、実践の舞台となった小大下島という土地のコンテキスト、二つめは、協働ワークショップにいたる大学生と島民の交流のコンテキスト、三つめは、“Tree of Life (人生の木)” という方法を選択した本研究実践のコンテキストである。

小大下島(こおげしま)は、瀬戸内海のほぼ中央、芸予諸島に位置する周囲 3.4km、面積 0.9km²の小島である。西に位置する岡村島、東に位置する大下島との三島で関前村(せきぜんむら)を構成していたが、2005年1月に今治市・越智郡11か町村の合併により、今治市の一部となった。安芸灘とびしま海道にて本州広島県呉市と陸路でつながる岡村島の港からフェリーで10分ほど、愛媛県側の今治港からはフェリーで1時間10分ほどの離島で、現在30名ほどが暮らしている。『関前村誌』(1997)によれば、近世の小大下島は無人島であり、岡村、大下の入会地であったが、全島が石灰岩からなるため、明治以降、石灰が各所で生産されるようになったという。やがて国内鉱工業の発展に従い、石灰の需要が高まるにつれ、多くの鉱山がつくられ、住民が増え始める。1883年(明治16年)の時点で人口は100名を超えている。昭和に入り、戦時中は生産量も下降するが、戦後は敗戦再建のセメント不足の波に乗り、島の外形が全く変化するほど大量に石灰が掘られ、昭和35年の時点で人口も500名を超え、ピークを迎える。

島の古老に聞くと、この頃の小大下島は賑やかで、商店やパチンコ屋が並び、芝居の興行なども行なわれたという。しかし、可採埋蔵量の多くを掘り尽くした後、1960年代には、大企業が採掘を休止し、次々と鉱山が閉鎖されると、その従業員や家族は急速に転出し、昭和の終わりまでに人口も100名近くにまで急減する。その後も人口減少は進み、現在では、70歳以上の高齢者が人口のほとんどを占め、世帯構成でも、高齢者の独居、夫婦のみ世帯が大半という過疎・高齢化の著しい島である。島民の子世代は、ほとんどが島外の都市部で生活を営んでおり、その半数以上は、関東・関西の遠方で暮らしているため、島への帰省は年に1～2回ほどである。現在、島民の多くは、畑で自家消費の野菜等を栽培しており、午前中は畑仕事、午後は自宅ですくすく過ごすという生活を送っている。

小大下島の人々と広島国際大学の学生との直接的交流は、2013年10月、「小大下島民ふれあいの集い運動会」に筆者（矢原）が、ゼミの学生とともに参加したことがきっかけである³。

「小大下島民ふれあいの集い運動会」は、1993年、過疎化の進む島で島民が集まり、仲良く交流する機会として始められたもので、以来、毎年ほとんど全島民が参加して開催されている。2013年に学生たちと参加した際には、競技で使う道具の準備の手伝いなどしながら、競技やその後の懇親会にも参加させていただいた。学生たちにとって、商店も自販機もない過疎離島で元気に暮らし、自分たちを温かく迎え入れてくれる高齢者たちの姿は印象深かったようで、2014年度からは、「しましまサロンプロジェクト」と題して、島民と学生が協働して月一回程度のサロン活動を開催することとなった。

2015年度には、「しましまサロンプロジェクト2015」として、さらに島民の語りに触れるため、今治市社会福祉協議会のコミュニティワーカー倉橋敏之、広島国際大学院生の藤本静香と筆者が考案した「じぶんノート」⁴を島の人々と学生とで作成していくワークにサロンで取り組み始めた。しかし、そこでは高齢者が自身でノートへ記入することの難しさや、高齢者の語りを学生が聞き書きすることの難しさも感じられていた。そうしたなか、2015年9月に開催された日本家族研究・家族療法学会第32回大会にて、立正大学の安達映子教授による研究報告⁵を通して、Denboroughらの具体化した“Tree of Life（人生の木）”が高齢者向けのツールとしても有効であるとの示唆を受け、ナラティブ・アプローチに関心を持つ本稿執筆メンバーによる研究会を開始することとなった。

以上、本研究実践のいくつかのコンテクストを振り返るならば、過疎・高齢化が進み、住民とともにコミュニティ自体がある種の老年期に達しているともいえる離島というフィールドにおいて、そのコミュニティ外部の存在である大学（学生及び教員）との交流の機会が偶然に生まれ、双方の語り（ナラティブ）が交わるサロンという場が成立していること、そして、そこで交わされる個々の語りをさらに協働的なもの（コラボレイティブ・ナラティブ）にするための一つの方法として、“Tree of Life（人生の木）”が試みられたことが理解されよう。

2. 実践をめぐる考察—ナラティブ・コミュニティの観点から

つぎに、本実践の理論的含意について、ナラティブ・コミュニティの観点から振り返ってみたい。ナラティブ・コミュニティ概念が最初に提示されたのは、J.Rappaport による。コミュニティ心理学の研究者として知られる Rappaport (1993) は、ナラティブ・アプローチの観点からセルフヘルプ・グループの働きについて再検討する中で、従来の専門家コミュニティによって定義づけられた代替医療の一種としてのセルフヘルプ・グループの捉え方に対し、そこで何らかのアイデンティティ変容が生じるような場として規範的ナラティブ・コミュニティ (normative narrative community) という概念を提唱している。ナラティブ・コミュニティとは、個々人のパーソナル・ストーリーが、当該コミュニティにはらまれたコミュニティ・ナラティブを反映しつつ変容していくような場を意味する。国内においては、野口裕二 (2002) が、セルフヘルプ・グループ、フェミニスト・セラピー、べてるの家等の実践を踏まえ、ナラティブ・コミュニティを「語りの共同体」であると同時に「物語の共同体」でもあるものとして概念化している。語りの共同体としてのナラティブ・コミュニティは、語りを生み出すという面と、語りによって維持されるという面を有する。物語の共同体としてのナラティブ・コミュニティは、参加者の語りに共同性を与えるような「物語」の共有という面と、グループ自身の来歴・存在意義を明らかにしてくれる「物語」の共有という面を有する。

これら従来の議論においては、セルフヘルプ・グループ、あるいは、特定のセラピー的文脈に限定して描出されているナラティブ・コミュニティ概念について、その本来のポテンシャルを引き出すために、より普遍的なコミュニティをめぐる問題に適用可能な概念へと展開させる必要があると筆者は考えている。本稿において詳述する余地はないが、ここでは、野口がナラティブ・コミュニティ概念をめぐる提示したコミュニティという形式のはらむ「多様性の確保」と「不安定さの克服」という二面性に関して、広井良典 (2009) のコミュニティ論により敷衍することで、そのイメージの一端を素描しておこう。広井は、その議論の中で社会生態学の知見を踏まえつつ、「重層社会における中間集団」ということ、すなわち、その内部的関係性と外部的関係性の両者を有する「関係の二重性」にこそコミュニティの本質があると指摘している。コミュニティに見られる内部的関係性とは、集団の内部における同質的な結びつきを指し、外部的関係性とは、異なる集団間の異質な人の結びつきを指す。こうした広井の議論を通して、先の野口のナラティブ・コミュニティをめぐる議論における「多様性の確保」と「不安定さの克服」という一見相容れない二つの意義について考えるなら、異質さ、新しさを呼び込む「多様性の確保」がコミュニティの外部的関係性により、確かさ、安心感を提供する「不安定さの克服」がコミュニティの内部的関係性により実現されるであろうことが理解できる。すなわち、コミュニティを重層社会における中間集団と捉える広井の視点に立つならば、「多様性の確保」と「不安定さの克服」という二つの動きは、その内のおよび外的関係性のはざまにおいて生じるコミュニティのゆらぎを意味するといえよう。無論、そうしたゆらぎは、たんにネガティブな意味を持つものではなく、むしろコミュニティの輪郭を新たに際立たせる効果も有する。コミュニティがそうしたゆらぎに直面するなかでこそ、あらためてコミュニティ・ナラ

ティヴが前景化し、その問い直し、語り直しが要請されることになるのである。

では、本実践において、いかにしてコミュニティ・ナラティヴが前景化し、いかなるナラティヴ・コミュニティが生起したと考えることができるだろうか。前節に述べたように、急速な過疎化・高齢化が進み、全島の人口が 30 名ほどときわめて少ない小大下島の島民は、港周辺の狭い範囲に近接して居住していることもあり、日常的にも様々な関わりをもって生活している。仕事を定年後、U ターンで島に戻ってきた島民も含め、基本的に古くから小大下島の歴史を共有してきた人々の集まりであり、島への強い愛着とともに、都市部には見られない強固なコミュニティ・ナラティヴがそこに存していることが推察される。とはいえ、島民が一堂に会して語り合う機会自体は、島民全体の高齢化とともに、必ずしも多くはなくなっているという。そうしたなか、2013 年 10 月から始まった大学の学生・教員との交流は、島民が一堂に会する機会を創出することを意味していた（毎回のサロンへの島民の参加率はきわめて高く、過半数の島民が参加している）。また、島の歴史を知らない外部からの訪問者である若者たちに、あらためて島の歴史（コミュニティ・ナラティヴ）や、自身の歴史（パーソナル・ストーリー）を語ることは、既存のコミュニティ・ナラティヴを再活性化するばかりでなく、サロンの回を重ねるごとに顔馴染みとなっていった訪問者らを交えた新たなナラティヴ・コミュニティの創出も意味したといえる。そして、そうした島民・学生参加のサロンの延長線上で実施された今回の“Tree of Life（人生の木）”の実践は、島民・学生が協働して個々の「人生の木」を作成することを通して、そのパーソナル・ストーリーを相手と自身の双方に描いて見せること、そして、互いの「人生の木」を共有することを通して、新たな「森」としてのコミュニティ・ナラティヴにつながったものとして自身の物語を位置付け直す一歩となったのではないだろうか。「人生の木」を描くプロセスのなかで、高齢の島民からは、学生たちに様々な人生訓が語られ、それが島民自身の「人生の木」の「実」や「種」に描かれる様子、また、「葉」の部分に学生たちの名前が書きこまれている様子からも、それを感じ取ることができた。学生たちの「人生の木」も、大学において学生たちのみで作成された際とは、異なるニュアンスがそこに加味されたように思うが、その詳細については、別稿に記すこととしたい。

おわりに

以上、今治市関前地区小大下島で 2015 年後半に取り組みされた“Tree of Life（人生の木）”を用いた学生と高齢者の協働ワークショップについて見てきた。ワークショップ参加者である島民や学生はもちろん、研究実践を担った研究会メンバー（本稿執筆者三名）にとっても、初めての試みであり、事前準備、ワーク練習、ワークショップ当日と、試行錯誤することも多かったが、それらを通して貴重な気づきと学びを得ることができた。第一章で紹介したように、“Tree of Life（人生の木）”は、四つのパートからなるワークであるが、今回のワークショップでは、その前半部分をアレンジして活用している。無論、この方法のエッセンスやナラティヴ・アプ

ローチについての理解が大前提ではあるが、どのような場で、どのような参加者が、どのような目的で取り組むかにより、そのコンテクストに即した柔軟なアレンジや工夫を行なうことが可能であることも、“Tree of Life (人生の木)”の大きな魅力のひとつと言えるだろう。今後、日本国内の多様なフィールドにおいて、いかなる活用が可能であるのか、さらなる研究実践の蓄積を目指したい。

謝辞：本研究実践に参加・協力いただいた小大下島民の皆さん、今治市社会福祉協議会の皆さん、広島国際大学チャレンジプロジェクト「しましまサロンプロジェクト2015」参加学生の皆さんに感謝の意を表します。

付記：本ワークショップの実施及び本稿の執筆に際しては、執筆者の所属する各学会の研究倫理綱領を踏まえ、ワークショップ参加者に適切な事前説明を実施するとともに、参加の同意、研究成果の発表への同意を書面で得ている。

注

- 1 当該研究は、「2015年度 医療福祉学部 特別研究助成」（広島国際大学）に採択された研究である。研究代表者は、広島国際大学 医療福祉学部 医療福祉学科 池田明子、共同研究者は、同所属の矢原隆行、岡本晴美である。
- 2 REPSIは、東・南部アフリカで子どもや若者の貧困、紛争、HIVとエイズによる壊滅的な社会的、情緒的（心理社会的）影響を軽減することに取り組むために2002年に設立された非営利活動団体である。
- 3 矢原は、それ以前より関前諸島の地域福祉に関心を持ち、当時、今治市社会福祉協議会関前支所のコミュニティワーカーであった島崎義弘、小大下島自治会長であった松橋禮治、民生委員の上原千鶴子氏と交流があったため、ゼミ生が小大下島をフィールドに卒業研究（吉倉万紀子「遠距離介護をめぐる現状と課題—瀬戸内の過疎離島で暮らす高齢者への聞き取り調査から」広島国際大学2013年度卒業論文）を行なう等の関係があった。
- 4 南魚沼市社会福祉協議会で作成された「ライフデザインノート」等を参考に関前地区に合わせて考案した、自分と家族の歴史を振り返り、今後を考えるためのノート。
- 5 安達映子（2015）単身高齢者支援におけるナラティブ・プラクティス—“Tree of Life”の活用と当事者協働参画，家族研究・家族療法学会第32回大会研究報告。

文献

- Denborough, D. (2002). Community song-writing and narrative practice. *Clinical Psychology*, 17.
- Denborough, D. (2004). Stories from Robben Island: A report from a journey of healing. *The International Journal of Narrative Therapy and Community Work*, 2, 19-28.

- Denborough, D. (2014) *Retelling The Stories of Our Lives- Everyday Narrative Therapy to Draw Inspiration and Transform Experience*, W.W. Norton & Company : New York London, pp.10-11.
- Georgia, I. et al. (2009) The “Tree of Life” in a Community Context. *Context*, 105, pp.50-54.
- 広井良典 (2009) コミュニティを問いなおす, 筑摩書房.
- 野口裕二 (2002) 物語としてのケア, 医学書院.
- Ncube, C. (2006) The Tree of Life Project, *The International Journal and Community Work*, 1, pp.3-16.
- Rappaport,J., (1993) Narrative Studies, Personal Stories, and Identity Transformation in the Mutual Help Context, *Journal of Applied Behavioral Science*, 29(2), 239-256.
- 関前村誌編集委員会編 (1997) 関前村誌, 原印刷.